スミス経済成長論とリカードウ

水田　健（東日本国際大学）
mizuta@tonichi-kokusai-u.ac.jp

スミスとリカードウを比較しつつ、かれらのいだく経済ヴィジョンの相違と具体的な経済成長論における取り組み、あるいは両者の分業観の相違とそこから生まれる国際経済論との関連を考察する。これらの考察によって、スミスとリカードウの全体像の特徴が見えてくるだろう。

【1】スミスとリカードウにおける経済ヴィジョン

スミスの「自然的自由の制度」のもとでは、個々人は自生的に形成された一般規則としての正義を遵守したうえで利己的行為を行うが、それは慎慮の徳性にかなった行為として社会的是認を受けている。そして、この社会的に認知された個々人の利得活動の一環として貯蓄は自然に増大する。さらにこの貯蓄が投資（資本蓄積）されると、それにともなって分業の細分化が進み労働生産性が上昇し、それとともに、この資本蓄積によって雇用も増大していく。スミスの世界では、資本蓄積はこのように、労働生産性上昇と雇用増加という経済成長の二要因を同時に突き動かす起動力として働き、それによって経済は自生的に成長していく。また、この「自然的自由の制度」のもとでは、農業から製造業、国内商業、そして最後に外国貿易と、順に資本あたりの付加価値生産性が高い部門から資本は投下されていく。したがって、自動的に資本の投資効率は高くなる。スミスの「自然的自由の制度」においては、フローとしての毎年の「国富」はこのように増大していく。これがこの「制度」からうまれる帰結である。

だが、このことからすぐに、「自然的自由の制度」は国富増進という目的に対する手段だとはいえない。スミスの「自然的自由の制度」においては、社会の中で自生的に形成されてきた公平な観察者の基準が、そのつどそれぞれの行為の妥当性を判断する物差しとなっている。したがって利己的行為も、その適正さはまず社会の中で徳性を持つ行為として認知されるのであって、さしあたりそれは帰結とは関係ない評価をうける。帰結としての国富増進への貢献は、まさに「見えざる手」による偶然の所産なのである。したがってスミスの場合、政府活動の裁

量性の幅は極力限られてくる[1]。帰結主義の場合、経済的自由への制約限度を設けることは非常に難しい。

このことは、一般に経済学の伝統とは異なった道といえよう。物的富あるいは効用水準などの目的の達成度合いから、個々の経済行為の妥当性は一般には評価されている。この意味で帰結主義は経済学の一般的伝統である。ではリカードウにおいては、経済のヴィジョンはどのように捉えられていたのか。

スミスとの対比で見るならば、リカードウはむしろ伝統的な経済学の立場に立つといえよう。スミスとともに同じ経済的自由主義を標榜しつつも、リカードウの経済学は帰結主義的なものである。リカードウにとって経済は、「人民の厚生」という目的を達成するための手段であった。

> 「政府はこれらのもの（経済学の原理……筆者）を厳守することによって、その支配下にある人民の厚生（the welfare of the people）をかならず増進しうるのです。貿易の自由からうまれる利益や、人口に対する何らかの特殊な奨励を与えることからうまれる弊害ほど明らかな事柄がありましょうか」[2]

リカードウはここで、「人民の厚生」を促進するためには、経済学の原理に基づく制度が有効に機能することが必要であり、そのためには自由貿易を行い、救貧法のような人口奨励策を廃止しなければならないと考えている。つまり貿易や労働市場の自由化は、人民の厚生を高めるために必要な方策であった。リカードウは、政府の干渉のない自由な経済は大きな繁栄をもたらすものとみなしている。ここには、通常の帰結主義的経済ヴィジョンが想定されている。

これらの異なった経済ヴィジョンのもと、スミスとリカードウは具体的にどのような経済のメカニズムを想定していたのであろうか。まずスミスの経済成長論から考察していこう。

【2】スミスにおける自生的経済成長

一般にスミスの経済学は、「見えざる手」の理論に導かれた自由放任の経済体系といわれることが多く、それは、市場での個々の分権的経済活動が価格メカニ

---

[1] スミスの場合、「商業」そのものが、秩序や善政あるいは個人の自由と安全をもたらすというように、商業の発展そのものが、逆に「自然的自由の制度」を形成するという側面をももつ。したがってそれだけ外部の帰結主義的介入を排除する構造をもっている。

[2] David Ricardo, *Letters 1819-June 1821, in P. Sraffa (ed.), The Works and Correspondence of David Ricardo,* vol. 8, Cambridge U.P.,1952, p.228

ズムを通して、その経済を効率的な状態に導くことを指している。いわば市場の調整機能に焦点が当たっている。だがスミスの経済学のなかに入り込んでみると、こういった想定には少なからず違和感を覚えざるを得ない。スミスの経済学のなかで描かれているのは、道徳哲学に基づく経済主体の歴史や制度や慣習のなかでの行為であり、さらにそれは単に市場機構の分析というだけではなく、むしろ自生的な経済成長のメカニズムを分析したものとなっている。スミスの経済学では、動態的な経済成長論が理論分析において大きな比重を占めている。その特徴は経済成長の自生性であり、「自然的自由の制度」のもとでは、まさに国富は自生的に増加していく。スミスの経済成長論を、労働市場と生産物市場とを通して分析していこう。

スミスの労働市場分析は、時間の経過を要する労働力の形成理論と、今期における賃金基金説的労働需要論とからなっている。まず労働需要の側から見ると、労働市場では賃金基金としての資本（ストック）量だけの労働需要がおこり、この資本量と今期の労働量とから今期の賃金率が決まる。これが自然賃金率である。そして、この今期の賃金率と、「普通の人道にかなった最低率」[3]とよばれるあらかじめ与えられた賃金率との差額に反応して、次期の労働供給量が決まる。これは、最低賃金率は、子供の扶養も考慮してその社会の人口を一定に保つ水準なので、最低率をこえる賃金差額分は、出産と養育を促し人口を増加させるからである。リカードウの場合、市場賃金率と自然賃金率（＝リカードウにとって人口を一定に保つ賃金率水準）との差額が労働供給を決定するが、スミスの場合には、自然賃金率と最低賃金率との差額が労働供給を決定する。このように労働市場では、賃金基金としての資本による労働需要が次期の労働供給を決定する構造となっており、人口増加メカニズムが内生化されている。

つぎに生産物市場では、分業の細分化がすすむたびに労働生産性が上昇すると想定されている。そしてこの分業の進展度合いは、スミスの場合、それに先立って資本がどれだけ蓄積されているかにかかっていた。それは、資本量が多いほど雇用量が大きくなり、それに対応して分業の細分化も進むからである。そうすると、資本蓄積に応じて雇用はすすみ分業も進化し、それと同時に労働生産性は次第に上昇することになる。ここでは生産性上昇メカニズムが経済のなかに内生化されている。またさきに見たように、労働需要は賃金基金としての資本量の大きさで決まり、それが次期の労働供給を決定する。そうすると、資本蓄積は、スミ

---

[3] Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776, ed. by R. H. Campbell, A. S. Skinner and W. B. Todd, Oxford U.P.. 1976. p.86（以下 WN と略記する）

スの経済成長にとって必須な、人口増加メカニズムと生産性上昇メカニズムとをともに引き起こす機軸的役割を果たしている。

さらにこの資本蓄積の大きさは、利潤および地代所得の中からいかに不生産的消費支出を減らし、どれだけ貯蓄を増やせるかにかかっていた。ところで、スミスにとって自然な状態としての進歩的社会では、「資本は、個人の私的な節約や堅実な行動によって、つまり、自分たちの暮らしをいっそうよくしようとする普遍的で継続的、不断の努力によって、黙々として徐々に蓄積されてきた」[4)]。貯蓄は道徳哲学に基づく有徳な行為として社会的に認知され、不断にその形成がすすんだ。したがって進歩的社会においては、貯蓄が自然にすすみ資本が蓄積され、雇用の増加と分業の進展による生産性の上昇とがうまれ、さらに労働供給が資本の需要に応じて供給され、自生的な経済成長が可能となる。このように、スミスの「自然的自由の制度」では、人口増加メカニズムと生産性上昇メカニズムとが内生化され、貯蓄による資本蓄積がそれらを起動させることで自生的な経済成長が続くメカニズムが機能している。

【3】スミスとリカードウとにおける分業観の相違

スミスの自生的経済成長を支える生産性上昇メカニズムは、スミス特有の分業観からうまれている。スミスにとって、「労働の生産力における最大の改善や、熟練、技能、判断力の大部分は・・・・・分業の結果」[5)]であり、その原因ではなかった。学者と荷担ぎ人足の間の、一見すると大きな資質の相違も、生来のものではなく、むしろ選択した特定の分業分野で培われたものであった。資質の相違が分業をうむのではなく、分業による専門特化が資質の相違をつくりだす。そして、資本蓄積にともなって、作業場内分業と社会的分業とが細分化されるごとに、経済全体の生産性が上昇していく。つまり分業が生産性を変化させる。

一方、農業における収穫逓減を前提するリカードウの場合、資本蓄積は、製造業部門の生産性を一定としたまま、農業生産性を低下させる。製造業部門では、技術変化による生産性の上昇はあるが、それは資本蓄積と連動するものではない。農業においてのみ、資本蓄積の進行は農業生産性を低下させる。そして、この両部門における労働生産性の比率が、比較生産費説をとおして国際分業の構造を決定する。スミスにおいてもリカードウにおいても、資本蓄積は経済の生産性を変え、経済成長の機動力となるが、スミスと異なってリカードウの場合、産業間での生産性の相違が国際分業のあり方を決める。これはスミスの、分業が生産性を

---

4) WN p.345
5) WN p.13

変化させるという経路とはちょうど逆の経路となっている。

ところでこのリカードウの国際経済論では、通常の教科書的なリカードウモデルとは異なり、生産可能フロンティアは線形ではなく、農業の収穫逓減を反映した曲線となっている。つぎにリカードウについてこのことを資本蓄積論との関連で考察してみよう。

【4】リカードウの資本蓄積論と国際経済論

「人民の厚生」を高めるためには自由貿易が必要だと考えたリカードウは、比較生産費説と資本蓄積論を両輪とする経済システムを構想した。一般にリカードウの経済学は、一方では比較生産費説の場合のように、経済の構成員全般にわたる「享楽」の増大という視点をもつと同時に、他方で資本蓄積の進展にともなう三大階級間での所得分配の変化という視点をもつ。それぞれがリカードウにおける静学と動学といってよいが、彼は自由貿易論を主張するとき、後者の資本蓄積論のケースでは、二つの資本蓄積手段があると考えていた。ひとつは安い穀物（賃金財）の輸入が賃金率を下げ、それが利潤を増加させることで貯蓄が増える場合。ふたつ目は、安い資本家用消費財輸入によって消費額が減少し、これが貯蓄を増加させる場合である。いずれの場合も、これらの貯蓄は投資されて雇用をうみさらに生産を増加させる。そしてこの資本蓄積論の視点が、もう一方の比較生産説による「享楽」の増加という視点と並存し、両者相まって「人民の厚生」を増大させる。

ところで、リカードウの比較生産費説からは、一見すると自由貿易によってイギリスは工業国に完全特化し、他国は農業国となるかのような印象がうまれる。しかしそれは、両国で各財の生産性が一定のため、それぞれどちらかの財の生産に特化すると想定されていたからだ。だが実際にはリカードウは、農業では収穫逓減を前提しており、したがって農工二部門の相対的生産性は変化し、それによって相対価値も変化することを知っていた。かりに農業に優位をもつ国が生産を増加したとしても、収穫逓減により農業生産性は次第に低下していくので、農工の相対価値は変化し完全特化には達しない場合もうまれる。リカードウはこの事実を、「機械と熟練について著しく優越し、したがって隣国よりもはるかに少ない労働で諸商品を製造しうる国が、このような商品の見返りに、自国の消費に必要な穀物の一部を輸入することがある」[6]といって認めている。

---

[6] *ON the Principles of Political Economy and Taxation, in P. Sraffa (ed.), The Works and Correspondence of David Ricardo,* vol. 1, Cambridge U.P.,1951, p.136

＜参考文献＞

Eltis, W. (1984) *The Classical Theory of Economic Growth*, Macmillan, 関劭監訳、角村正博・佐藤良一・竹治泰公訳『古典派の経済成長論』多賀出版、1991 年

Findlay, R. (1974) “Relative Prices, Growth and Trade in a Simple Ricardian System,” *Economica*, 41(161).

服部正治（1995）『穀物法論争』昭和堂

羽鳥卓也（1963）『古典派資本蓄積論の研究』未来社

羽鳥卓也（1990）『国富論研究』未来社

Hollander, S. (1973) *The Economics of Adam Smith*, University of Toronto Press, 小林昇監修、大野忠男・岡田純一・加藤一夫・斉藤謹造・杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』東洋経済新報社　1976 年

Hollander, S. (1987) Classical Economics, Basil Blackwell, 千賀重義・服部正治・渡会勝義『古典派経済学』多賀出版　1991 年

水田　健（1995）「アダム・スミスと経済成長」平井俊顕・野口旭編著『経済学における正統と異端―クラシックからモダンへ―』昭和堂

水田　健（2002）「アダム・スミスの『自然的自由の制度』と重商主義」竹本洋・大森郁夫編著『重商主義再考』日本経済評論社

水田　健（2004）「経済政策と経済的自由主義－リカードウ国際経済論の場合－」研究年報『経済学』（東北大学）65 巻 3 号

Negishi, T. (1989) *History of Economic Theory*, North-Holland.

Negishi, T. (1993) “A Smithian Growth Model and Malthus’s Optimal Propensity to Save,” *European Journal of the History of Economic Thought*, vol 1.

Negishi, T. (1994) *The History of Economics, The Collected Essays of Takashi Negishi,vol. 2,* Edward Elgar.

根岸　隆（2001）『改訂版 経済学史入門』放送大学教育振興会

Peach, T. (1997) “The Age of the Universal Consumer : A Reconsideration of Ricardo’s Politics,” *European Journal of the History of Economic Thought*, 4 (2).

Reid, G. (1989) *Classical Economic Growth*, Basil Blackwell.